

「孤島の鬼」脱文
2015

リニユーアル版と銘打って、春陽堂書店（東京都中央区日本橋）から二〇一五年二月二十日に出版された江戸川乱歩文庫『孤島の鬼』（A6判、三八〇頁、本体八五〇円）は、「孤島の鬼」の本文に脱落があるいわば欠陥本であった。

同書三三七頁の一四行から一六行は、

の世界では、君と僕とが全人類なのだ」

諸戸が何か云いつづけようとした時、ちようどその時、非常に変なことが起った。洞窟の他の端で、変な物音がしたのだ。蝙蝠や蟹かにには馴れていたが、その物音はそ

となつてゐるが、一四行の一重カギ（」）は句点（。）が正しく、そのあと改行して諸戸の言葉がさらにつづけられる。

一五行は不要で、この一行に文庫判で三ページあまりに及ぶ脱落がひそんでいる。底本は一九五五年二月に出た春陽堂版乱歩全集の第一巻だが、全集にあつた脱落がそのままニューアル文庫版に引き継がれたことになる。

全集では、同年四月刊行の第六巻に別刷りの「孤島の鬼」脱文（二頁）を挟み込む措置が講じられた。

その「孤島の鬼」脱文」を全文、以下に引いておく。

*

読者からのご注意によつて、第一巻の「孤島の鬼」の「生地獄」の章、百七十七頁下段三行目の次に。長い文章が脱漏していたことを気づきました、この部分は作者自身、同性愛慾の描写にいや気がさして、戦争中に削り取つたままの版で、戦後も出版されていたために、つい気づかなかつたのですが、今度の全集には、そういう削除の部分も復原するという約束なので、その脱漏の箇所をここに印刷しました。これを百七十七頁に貼りつけて下さい。

〔一七七頁下段三行目の終り「……全人類なのだ」の」をとり、に変え、行をあらためて同じ諸戸の言葉のつづき〕

「ああ、僕はそれがうれしい。君と二人でこの別世界にとじこめて下さつた神様がありがたい。僕は最初から、生きようなんて、ちつとも思つていなかったんだ。おやじの罪ほろぼしをしなければならぬという責任感が、僕にいろいろな努力をさせたばかりだ。悪魔の子としてこの上生きはじめをさらそうより、君と抱きあつて死んで行く方が、どれほどうれしいか。箕浦君、地上の世界の習慣を忘れ、地上の羞恥をすてて、今こそ、僕の願いをいれて、僕の愛を受けて……」

諸戸は再び狂乱のていとなつた。私は彼の願いの余りのいまわしさに、答えるすべを知らなかつた。誰でもそうであろうが、私は恋愛の対象として、若き女性以外のものを考えると、ゾツと総毛立つような何とも云えぬ嫌悪けんおを感じた。友達として肉体の接触することはなんでもない。こころよくさえある。だが、ひとたびそれが恋愛となると、同性の肉体は吐はき気を催す種類のものであつた。恋愛の排他性というものの、もう一つの面である。同類憎悪どうおだ。

諸戸は友達として頼もしくもあり、好感も持てた。だがそうであればあるほど、愛慾の対象として彼を考へることは、堪えがたいのだ。死に直面して棄てばちになつたわたしでも、この憎悪だけはどうすることもできなかつた。

わたしは迫つてくる諸戸をつきはなして逃げた。

「ああ、君は今になつても、僕を愛してくれんことはできないのか。僕の死にもぐるいの恋を受けいれるなさけはないのか」

諸戸は失望のあまり、オイオイ泣きながら、私を追っかけて来た。恥も外聞もない地の底の鬼ごつこがはじまつた。ああ、なんといい場面であつたらう。

そこは、左右の壁の広くなつた洞窟の一つであつたが、わたしは元の場所から五六間も逃げのびて、闇のかたすみにうずくまり、じつと息を殺していた。

諸戸もヒッソリとしてしまつた。耳をすまして人間の気配を聞いているのか、それとも、壁ずたいに、めくら蛇みたいに、音もなく獲物に近づくつあるのか、少しも様子がわからなかつた。わたしは闇と沈黙の中に、目も耳もない人間のように、ひとりぼつちでふるえていた。そして、「こんなことをしているひまがあつたら、少しでもこの穴をぬけ出す努力をした方がよくはないのか。もしや諸戸は、彼の異様な愛慾のために、万一たすかるかも知れぬ命を犠牲にしようとしているのではあるまいか」などと考えていた。

ハッと気がつくつと、蛇はすでにわたしに近づいていた。彼はいつたい闇の中でわたしの姿が見えるのであろうか。それとも五感のほかの感覚を持つていたのであろうか。驚いて逃げようとするわたしの足は、いつしか彼のねばつこい手につかまれていた。

わたしは、はずみをくつて岩の上に横ぎまに倒れた。蛇はヌラヌラとわたしのからだに這いあがつてきた。わたしは、このえたいの知れぬけだものが、あの諸戸なのかと疑った。それは、もはや、人間というよりは不気味な一匹の獣類でしかなかった。

わたしは恐怖のために、うめいた。死の恐怖とは別の、だがそれよりもつともつといやな、なんとも云えぬ恐ろしさであつた。人間の心の奥底に隠れているゾツとするほど不気味なものが、今やわたしの前に、その海坊主みたいな奇怪な姿をあらわしているのだ。

地獄絵だ。闇と死と獣性の生地獄だ。

私はいつしか、うめく力を失つていた。声を出すのが恐ろしかつたのだ。火のように燃えた頬が、私の汗ばんだ頬の上に重なつた、ハッハッという犬のような呼吸、一種異様の体臭、そして、ヌメヌメとなめらかな熱い粘膜ねんまくが私の唇をさがして、蛭ひるのように顔じゆうを這いまわつた。

諸戸道雄は今はこの世にいない人である。だが、私は余りに死者を恥しめることを恐れる。もうこんなことを、長々と書くのは止そう。

ちようどそのとき、非常に変へんなことが起こつた。そのお蔭でわたしは難なんをのがれることが出来たほどの、意外な椿事ちんじであつた。

〔一七七頁下段四、五行目を削除して、この次に六行目がつづく〕

*

信じがたいことに、というか、担当者はきつとあほだったのであろうな、と思わずにはいられないことに、この「孤島の鬼」脱文」にはさらに一段落、脱落があった。最後から二段落目、太明朝体で示した箇所がそれにあたる。

もつとも、リニューアル前の旧版『孤島の鬼』（一九八七年新装第一刷）もやはりこの段落を欠いているから、春陽堂書店編集部は確固たる信念のもとに脱落を断行したのかもしれない。

しかし、ここで唐突に諸戸の遠くない死を予言することによって、乱歩は「同性愛慾の描写」を一気に絶巔まで高めているのである。

そうした小説作法を嘉するためにも、光文社文庫版乱歩全集第4巻『孤島の鬼』にもとづいて、あえて当該の段落を挿入しておくことにした。

読者諒せよ。

二〇一五年四月四日、春陽堂書店のますますの発展を祈念しつつ

雄鶏屋ほんだら

「孤島の鬼」脱文
2015

……

編集・発行
名張人外境